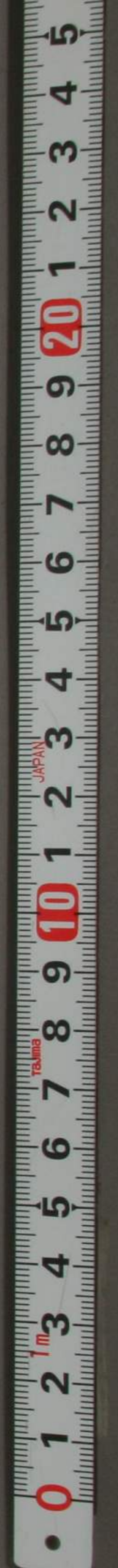


繪本拾遺信長記 十二

〜15  
3564  
12





門 へ 13  
 號 3564  
 卷 12



繪本拾遺信長記初篇卷之十二

目錄

繪本豊人波捕歌事

日圓

吳僧孝子とぬい

豊人有奇怪而到石山事

日圓

九字名号乃奇瑞

九字名号の奇瑞之事

繪本拾遺信長記初篇卷之十二

早稲田 大學 図書館  
 昭 34.6.3 受  
 藏 書



本津の岩合戦

小林園莞小田の戦いを抜く

鈴木豊人初陣する名之幸

園莞勇戦

を人小林と戦ふ

靈ありく佛歌と討しむ

繪本拾遺信長記初篇卷之十二

鈴木豊人被捕歌事

鈴木源市が一子をを人の一人乃母よつて後を告げ父が獲  
 し石山の城とて海に遊ばし幼稚者の只一人故郷とて出  
 しの武家の家のおひとは云々が痛はしうまじありさま  
 かり家出出く幼程二日恒右の海ににじりしに安よの  
 明智日向守岩と揃へ往来乃旅人を改まば驚ろくてい  
 通りがく守護の番兵を人と智めて何國よりいつくへ  
 通る者かちや審問やとよとつらう小罵つたりを人  
 甚ど怒きつりありさまそそ私に紀州熊野浦の若うそい  
 又ぬもよらやく世に去り渡世のいとも心又任せん

日本信長記卷十二





面本信長言初巻上



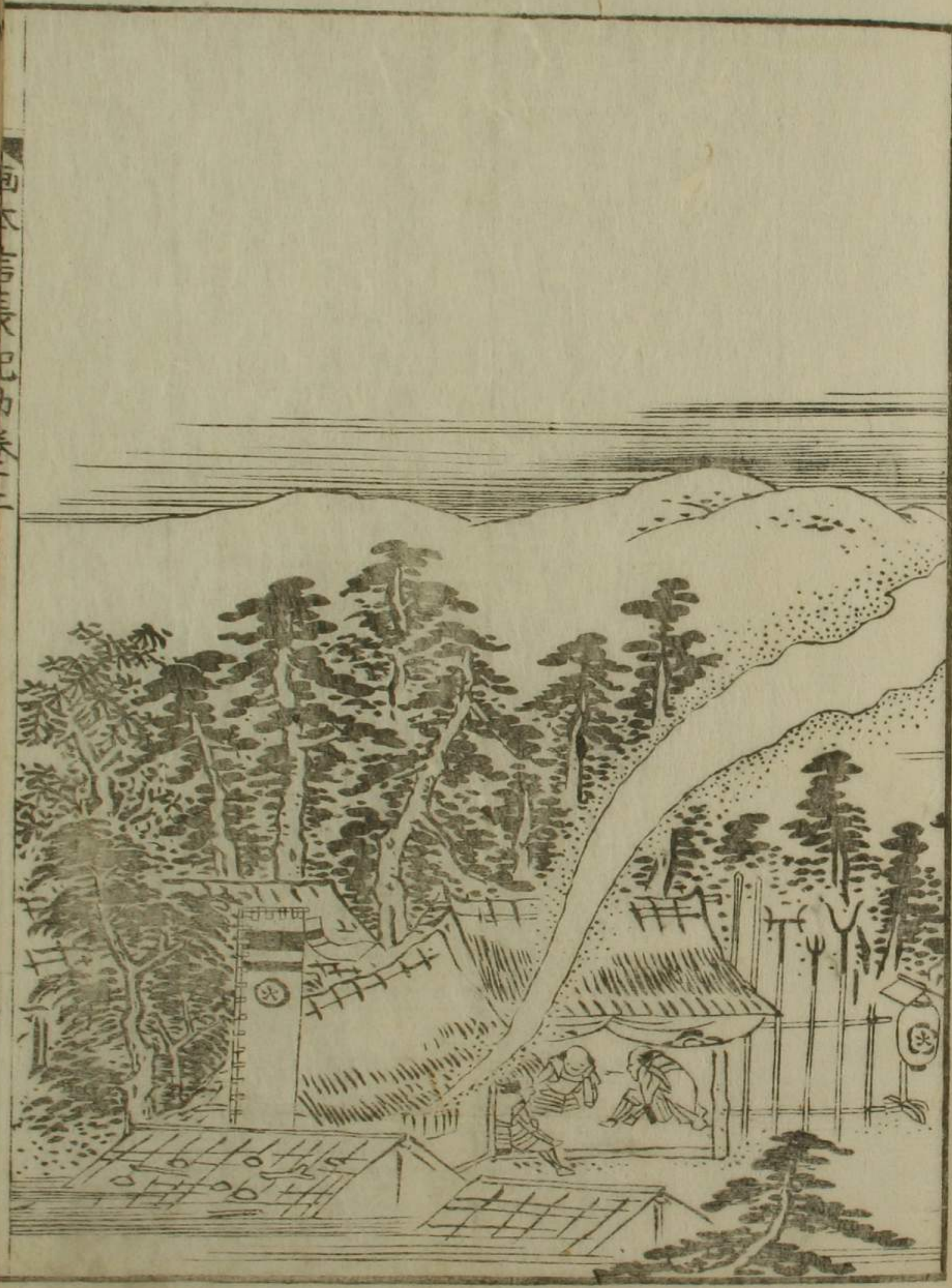
とらきこん  
鈴本老人  
摘とる

面本信長言初巻上









山崎闇斎先生遺稿



僧  
孝子  
殿

山崎闇斎先生遺稿

四



け若治後み眾人とて執て難改日向守光秀へかくと記ふ  
 光秀即專人と白砂と引物懐中せし多と披き刃を  
 又七年以若石山鎭城の後絶て若信なき疑きとありく  
 と書志はしけし専人今年いそや十に歳家になりて彼  
 杉栗んすの口惜とく自殺生宮又も及んと以成すまの  
 送命と犯し石山城中へ若治者入りけ戰場とせしつ  
 らも生死の隙をも御滝下されしと書年り鈴木孫市  
 及へと宛名せり光秀見そ大と感し備の城中乃勇士  
 鈴木孫市の子専人とふ者ありて歎なぐりも切き若の  
 多くの園と城へてもあぐと軍陣又絶て又と生死と絶  
 せんとは健げちるありまひ助けて城中へ送り度者あり

とも合戦の勢い歎方の親族捕得し味方謀斗乃一ツ  
 るれば能勞りて陣中より人愛しと下知したる小難率  
 等かこまり専人を引て一室の中は困窮甚疾きびく  
 番人と附獄屋と押はじきつりさまちり専人の免期を  
 極めけあを殺さうも戰場を討死するも又若の  
 みえうは先憎く命と命ししうう人て在るうは、うり  
 りうて又も再命せんもえううは心と心を定め自若と  
 て怨うくさるうりたるの孫市の子専なりたりと陣中  
 殊と称濼せり其後三交する以營中もいつそと靜  
 後より種敷の書耳とつしぬき専人の父又履し中  
 以城方勢と人乃りあひせし居るありき

日本書紀卷十二

六



灯乃落又人あり誰りううんともほし見れば身みの長六尺  
 有余あまの大法師だほふし曇乃夜とものよの神々かみかみりけりけり  
 るが番兵ばんべいの番ばん狐こ又またあやむと人ひとが番ばんに番ばん多たくの番ばん  
 人ひと眠ねきつり又はあやむれは法師ほふしと答こたへる者ものうく只ただ月つき又また  
 又またさうさうの体ていのどしけ僧そう人ひと又また向むかひく汝なん石山いしやま乃城のじやう中に到いた  
 又また對面たいめんはしてんととるが我われ只ただ今いま休やすむとてして休やすむは  
 いうふやくくと中ちゆうにわくふ人ひとの只ただ愛あいの心地こころして其そのいひ  
 い知しく福ふくども先まとれと知しひ美み僧そう大だい慈じ悲ひと密ひそかにして陣じん中  
 を道みちをさしめ給たまふるるべ記しをひて恩おんと報むかひなむ人ひと被おの法ほう師し  
 諾うなて考こう人ひとを肩かたよりけ被おの番兵ばんべい乃番ばん狐こ又またゆうくとてし  
 通ときとも一人ひとりも見み給たまふ者ものうく安やすくと營えい外がわ又また立たち出でるき

垣かきと飛とぶるのてくごび城じやうく石山いしやまはして証しやうのし何なにとまた天あま  
 物の不ふおるやと恐おそはしうりし不ふのりなり

豊人有奇怪而到石山寺

攝州せつしゆう东威とうい郡ぐん石山いしやま本願ほんがん寺じ蓮如れんじよ上人じやうじん乃草創くさくわうしてまより  
 後のち禮らい如じよ上人じやうじん相續あひつぎて化け蓋がいし給たまひ朝あさ附つ夕ゆふ附つの勅とく給たまふるせ  
 給たまふるるく門かど系けい乃美み徳とく系けい信しん一いつはしも清きよ淨じやうの道みち場ばなり  
 し又また去さる元もと龜かめのまじめより法はふ欵くわん信長しんぢやうとより又また兵馬へいばと勅とくし  
 宗門しゆもんを破やぶ却かへせんといはれ是こゝより乃諸國しよこくの門かど後のち集あつまりて大だい門もん  
 及びおよびはすりく又また失しや倉くらとつけ周まわる堀ほり又また挟さ間まと穿うらら隙ひまと  
 深ふかくし飛とぶるをといひしころ人ひと屋や敷しき合あ戦せん乃備そへのこころ  
 讀よ經きやうの夢ゆめの録りやく波なと度たし諸しよ妙みやく女によ者ものの種たねの御み者ものの攻せう鼓この音ね



老人  
石山乃  
城  
中  
也



日本傳長言初卷上



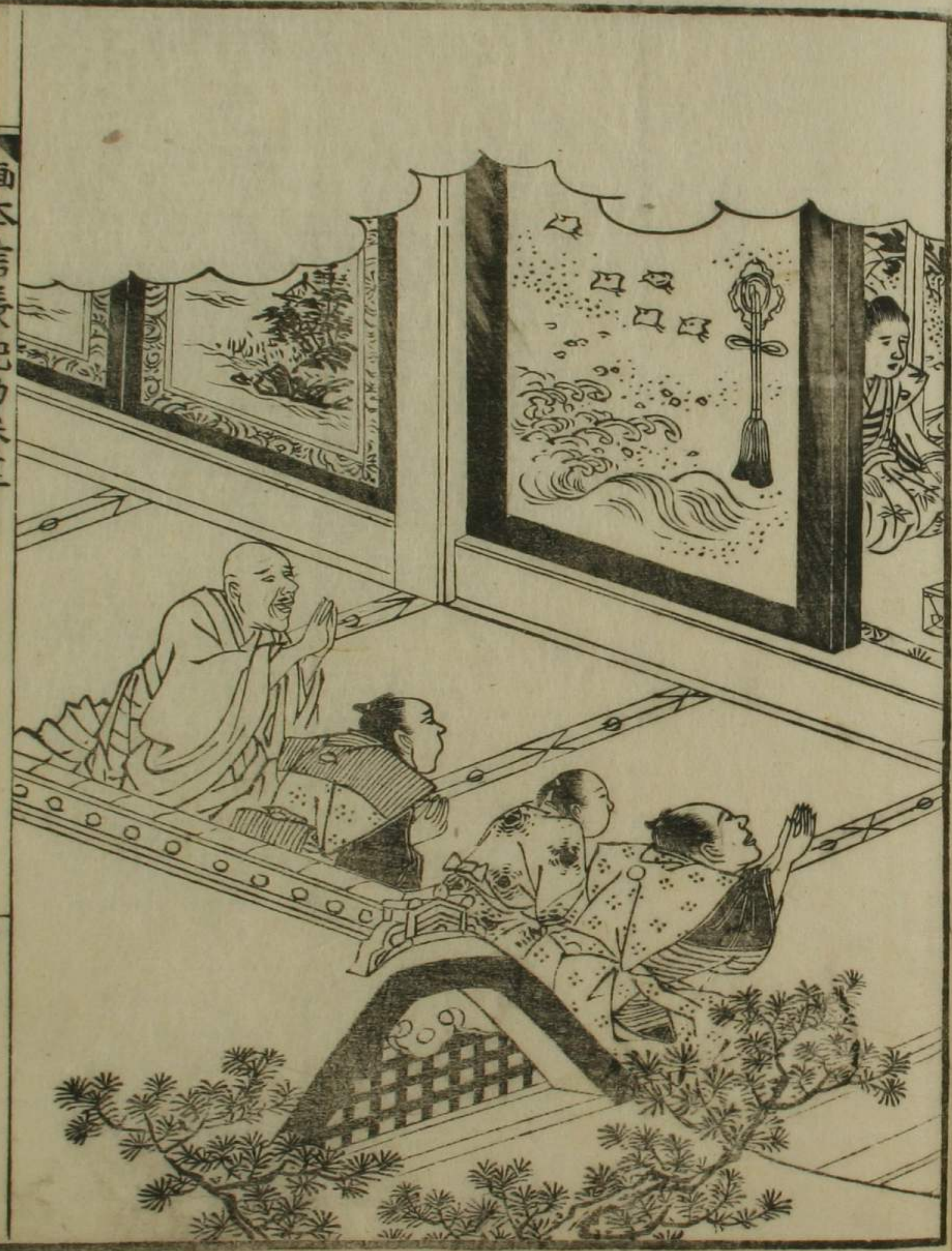
又化し當附信長率國河原へ歸ると人ども附城と構へ軍  
兵數多勢居る石山の城中も又又安き心なく組多く  
乃番兵守衛非常といはしめ同若と紀一行時と他以ハ  
なうりたり附又本軍のけし後又當以て俄又お家のを被  
の着城中の番兵多耳と聳くといへや敵方の曲者城中又  
悲ひ入るるなりと我一又豊の後へ去り来て見らる程は  
年の以十三に歳のみ少年夜更の番人又見習ひらと  
是派乃同若室中かり番兵彼少年とふくまて中やう  
汝若若より紀州難波の信人鈴木孫市辰の子とて人ど  
飯令孫市辰の子よもせよとい人様乃御息男よも  
是かく用心きびしき城中へ悲ひ入るるこそ怪しむれども

孫小田方乃同若も但し又城内又返心乃若ありていそら  
又汝と引入りや明白よすは命斗い助くぞし若り争  
かひ偽りうは上人の御着引出活如來の引守を極  
樂往生させてんもの勢ひ込で奏よりたり彼少年也  
とまらびささるるきちく汝等が疑ひ釋り又安へいふも  
我若ては城中へ悲ひ入り是はし我父の當城の勇將鈴木  
孫市郎門若より名乗り對面せんとおひし知信右の園所  
まで小田乃大御明智日向守ら番兵又見習ひらと捕ま  
りてあつらが不思議や今宵一人乃大法師我と寄り  
おひ藤地多峰とておひ飛に風乃ぞくま門と當城中  
け不我と捨長忽死と傳の飛い見失ひぬ是必天物魔非



南無不可思議如來

九字名号乃  
奇瑞





の我上人は荷旗して危難と敷い矢と對面せしめんとの斗  
 ひるるべし論の委蓋孫市反へけ旨と達し子ていそんが  
 事ししと市路りるべし其余に中事着以ていつと極制  
 どのうと聲し思ろく換のうりたり番兵多相後して先け  
 旨孫市反へ中入其と乃知又降ふとしとくまろく乃中  
 通しこれに教又任むる鳥林と柔々夜乃鶴何と交  
 と云いざうんそん人一人城中と在と交としと強勇の珍  
 本孫市走りはま川きまろくこれに八威とて別とされども  
 見まがふるくも何くぬ我子のそん人後々とむり移るる  
 傍近くまよりて休いふりてけ壁燧へあひ入りや始終  
 乃るの物語とてまゆる小豊人つりり孫市を面を見

叔父とてはまはくやと大地と躍りさめぐと歎きろくやぐて  
 面と上げぬしりども洋又演活し叔も不思議の事のいぬの  
 去状と元祖と人自筆紙深き山九字名号古郷と却その  
 耐より肌又付てゆいしと明智が陣石の橋とあり悉く棄い  
 去道しと今朝我傍又彼名号安全と柳らせ終る且又  
 叔乃消息短刀一腰ともよけ石にこれりいとく父が花  
 又置しとる孫市子細と交り眉と志らめ交り天狗妖怪  
 乃不ぬ又相似たり汝切雅多れども孫市が子としと天  
 狗又はくまは流狸又魅せると不交を忘却せる柔幼  
 と人し教しとく父ととり小築城の城おひとより  
 又く本國へ降り叔又仕へく考と費とてしとるやまま



よと使へたる小者人の只涙より多きと人の云ふもなりし  
う心と亮め短刀引ぬき自害せんとはしつるを番兵多群  
考てをくくめ是の孝人の孝心とこそなりし「まじくく  
如来の通力方便とこそ志すもくく人なりし答と教え  
よりなぐくへく称名なまらるるい承く忠義と盡さるること  
滋又報恩附徳なり」とたまぐ「透く空めたりたり  
けり」と人の御使又達し孫市父子よく御使方りけり  
一幸又就て信使らるるき子細ありとの御使方りけり  
と人又御湯「御下知又信使」  
と豊人を誘ひて廣書院  
へ出たりたり

九字名号奇瑞之事

廣書院の上壇中英は門を如く人御父子傳とけり  
御「孫人の老は軍陣給本重幸右は家老下同敷屋  
其外也留外候の侍席と心して速り御せり給本孫市の孝人  
を侍の御若らるる小平伏候と人信出さるる紀州雜賀郡  
よ給一屋一子孝人幸若と侍て裏よ来りよ「殊勝の  
りやに及びはえまらぬ山聖人御真筆の名号と持し  
御拜もまらばやとみさる小孫市謹でうけ給り膝あて  
指げ侍ればと人恭くと壇の登りけりせらと御真筆お遠  
はしとるもまは称名し孫人の一屋の西く瑞雲仰向し是は  
同書念佛くくあり難き御法なりたりと人兩眼又御涙と  
後人孫の末世の今又及びとも佛の御誓い空しくは高祖





國友傳長前新編



聖人まゝ西去は悔くせ給つた智恵の光明を放らさ  
 ら現猶とほしまんぞや今豊人が敵の擄とのまゝなりしも  
 天狗妖怪のふおもはるべしにけりも用山聖人まづ  
 姿と現くぬきぬき給ふも其徳とまゝきりし御名号の  
 下は泥のまゝ付らふも廣大慈悲の佛力と感とどしと  
 拵にして教へ給ふに孫市父子のまゝなりし御名号の下  
 の人々奇異なりおはしり給ふ不思議を蒙るに佛敵  
 乞ひ宗門永く是れなり何の疑ひもなきに陸奥の海を  
 りの踊りし門々敵びくるはまゝなりし人々へ去る下  
 一給ひ忠心得門下なり則ち加へ給ふ孫市父子が敵びぬき  
 ぬ物にしまん信長一とび道威をうらひ天下と佛の擄ひ

ぬしと忽朝霧のどく小田の覇業漸減し如上人一とび南  
 紀は流落し給ふとまゝも嵐の浮雲と拂ふとく敵百身の  
 今まゝ西と東に聖孫の衆人まじく御宗門孫繫へり  
 さう給ふも佛智よりまゝ世の例なるは仰ぐべくまゝに  
 一けり節も小田勢の隊も又川分口の城と築りする平に監物  
 安反平左衛門将若乃まお沼津内同編七又三左衛門に人  
 牒一合せ其勢三又百人松平隆平と下知と他人が敵を  
 捕へる本津の砦へ推し給へて鉄炮を飛し火矢と射りけり  
 又まゝなりし本津の砦も勢もまゝ大おのり下向し進陣  
 又百人の士卒も令し給へて花後乃拵口と固く堅め火矢  
 と飛し給へて  
 詮度と敵ふなりまゝも勢も大勢なりしが討とり討とり





小林園苑  
小田乃  
我ひと  
技く

日本信長言被卷二









尤  
勇  
然



又山姥と家とをいし人と喜し材定瓜搦め暴悪を及のさせ者  
なりしと弘世の耐るれば其強勢勇猛なる瓜搦漢し其符  
并順まよ拓るも教度の軍場よる名をばいよく母のが  
勇又湾里人と煙とこれと矢い傍若無人の曲者るれば符  
并う家取のまよ及び地門他家の者まよも憎まぬ者いなり  
たりけ日小林園苑主人順まの俊者として種者乃は若明智  
日向守り許すなり其攻るまよは瓜搦るるが石山の援兵  
勢い強く瓜搦同端の両勢実まよるも負まよ立て刀々まよ例の  
驕慢心大まよ小敵かのも石山勢何程のりあんや一実まよはま  
崩し勢いよまよじて若とも責落し已一人の功まよ他人と石  
にまよるも勢三十余人を左右まよ後一肌まよ是迄の強かまよる

若しより大長刀を車輪まよりし勝まよるる石山勢の撰まよ  
と啼と喚いと近入と刃入しが馬武者歩率のきららひるも  
と幸切落しに方八方雷光のどく馳巡りて薙まよはまよ  
勇に石山勢園苑一人は斬まよるも教丸して近付得れば志摩  
まよに即け形勢と刃まよ大まよ小怒りまよのりしき敵のまよまよ  
いで空まよりて刃入るしと槍矢槍門てまよ向人の園苑何を敵  
を撰りて波瀾のどく薙刀を振て一符一束秘術と盡し我人  
よりまよに即いららるる物に槍先園苑遠し用て決裂し  
碎けよと薙る瓜搦まよに即其長刀まよまよんとせしが系換し  
て屏風を倒れ下り馬より下りまよと落るり園苑はより  
かりしと斬んとする瓜搦刀乃下り志摩等が良等六十余



老翁  
を人  
小林と  
戦ふ



日本書紀卷三



人一日は近隔きびしく防ぎ我ひをと夥しく退きたる石山  
 方乃大お勇武のきこるる志摩とに即ちかくのどく  
 かりたるは後兵等るるい思は右往花往は丸と走る小林  
 園花勝はあがり石山乃弱兵一人も走るるゆらうれと大者よ  
 味わり大まういよあかく荒まるるいもとほしかりたるけり換之  
 け附鈴木孫市の小るる丘よ馬を走味方を下知してあ  
 かり小田乃無勢勇気とほし石山方級軍よ及んとは是  
 全く小林一人は近うやまうる者れが誰よとあはけ者  
 を討とらよと志き門く下知とほしつ道と女に即とて討  
 ぶりりし大劉の志きとの我討とらんといふ者るくあぐと  
 切らるるたまわり附は鈴木が軍隊の中より洗ひ筆の具

是は黄金作りのお方と帯連抄毛ちる馬よ跨りたるらふ小  
 名のりたるは紀伊國難波乃役人鈴木孫市即良園とる  
 鈴木孫人少年十に敵軍のくがたじめ之年若れども大  
 劉の若るるぞ首をたてるるるに婦人孫人とち方扱をばり討て  
 うまは小林園花大き小笑ひ押のどどれたの小兜おるるい  
 不足之をちく遊よとまひ捨く孫市が本陣めがけ近  
 を小兜と侮りて足堂とあうせ終ふると稀妻のどく切て  
 うまは園花大の眼とちり門と見開き笑月も顔も羨しき  
 小兜めお慈悲の心とみて命斗と助けらんは飛で火に入  
 養虫は世のいとまをせんといひる門と長刀おちり只一羅  
 と討らる小ちるる遠くを人かみ孫若後花右とあはし



霊を佛て 討を 歎



画本傳長言社



爰より彼を不にわくまのけらふつる門まひらゆくを力うげ  
目小くまふは因飛の六尺ゆさう乃大男十に敵なるを人  
秘術と産し我ひくいつま今日の軍の足りめこと西陣  
互に鳴りと志のし服をくく見物に敵は執りて奮と合せ  
てく危きゆかぎりは因飛元来不敵の勇兵もさど  
け小胆悔り離れと精神と勵し門と喚ひく老人が塊の志は  
微塵よりれとおふに不恩後や西馬のる小産のどれ大  
法師のりれ出因飛が打長刀を中よさう(老人が必死と  
般入西陣の軍兵怪)やと目ととめてさうふあまは  
けうたよもあはばうたうさ老人が又法師の姿と見るに  
睨くさうの筆跡をみて語るさうは西軍皆碎るがさう

或は又麻る者の下し勇強の因飛力勞と息入りきま  
こくも大汗とるげし喚く夢い牛のやゆふ小似く馬の  
うも志と後より人地さうと付入く若返のを  
を丁と斬飛のさての款をつうし産よふ門ては又附入  
利腕利刃にケ石斗斬りさう小因飛今いたまうかの  
薙刀をうらまるとさく大産ひろげとかけゆぐり極  
んと叫ぶ種又老人のりゆしくよく見とほしと體の  
鼻までを門しと蹴るはしもの因飛志だしたまうは馬か  
さうと落さうふつひく飛りり押入る首とえさうさうは  
附西軍爰のさめてさうさうと敵は不恩後のさる名  
騒るさう若りはし城中よりけとまと見てさうは附分り



討て出さる退まらざるとく下向少進自ら三百余人の還兵と  
 ありて人城戸を閉ひて切ておれしが鈴木孫市志摩よに即  
 二も余人周を廻り標合せし我より小終又小田方敷く  
 又崩さざれば我されたと趣知と退詰く討え首二百  
 余級け附日西山又没し殊更雲湧く敷ひ多り星の光  
 見えざれば我いれ是をたかりと趣る款を退どてしめて其  
 疾の本津乃砦又宿陣せり

繪本拾遺信長記秘篇卷之十二終



